

G8 北海道・洞爺湖サミットを持続可能な世界をつくりだすための「航海」の出発点に = 2008 年 G8 サミット NGO フォーラム第 2 期にあたって =

2008 年の主要国首脳会議（G8 サミット）は、7月に北海道・洞爺湖畔で開催されます。日本を含む 8 つの「主要国」の首脳が集結する G8 サミットは、冷戦終了後、途上国の貧困と開発、世界規模の感染症対策、気候変動を始めとする環境問題、紛争などによる各地の人道危機など、地球規模の課題についての政策をつくり、世界の人々に対して様々な約束をする場となってきました。

G8 サミットが世界の人々に大きな影響を与える以上、そこに世界の市民社会の声を反映し、よい政策を作らせ、不適切な政策を改善し、また、G8 諸国が世界の人々に行った約束を守らせるために努力するのは、G8 諸国、とくに開催国の市民社会の責任です。私たち 2008 年 G8 サミット NGO フォーラムは、G8 北海道・洞爺湖サミット（以下、「洞爺湖サミット」）に向けて、この責任を果たすため、途上国の貧困と開発、保健、教育、気候変動や生物多様性などの環境問題、軍縮や平和構築、人権に取り組む日本の NGO が結集して、2007 年 1 月に発足し、現在までに 100 を越える団体が参加しています。

日本の NGO が分野を越えて集まり、G8 サミットに向けて、ネットワークを作って政策提言をし、その実現に取り組んだことは、これまでになかった画期的なことです。私たちはこの仕事を、貧困・開発、環境、人権・平和の 3 つの分野で、日本・世界の市民社会の考え方や取り組みの実績を集め、G8 に向けて私たちの政策を作り上げていくことから始めました。その作業は、各分野で作成したポジション・ペーパーに結実しています。また、2007 年の G8 ハイリゲンダム・サミットにあたっては、ドイツに多くのメンバーを派遣し、海外の様々な市民社会ネットワークとの連携も構築しました。さらに、2008 年の G8 サミットの開催地で結成された「G8 サミット市民フォーラム北海道」をはじめ、日本の多様な市民社会との連携も作りつつあります。

この 8 ヶ月間の活動の中で、見えてきたことがあります。それは、1975 年にフランス・ランブイエで開催された第 1 回サミット以来、自明の構造とされてきた、欧・米・日主導の世界の政治・経済構造が、今、大きな転換期にあるということです。もともと G8 は、この構造を前提に、グローバル・ガバナンスのあり方を調整する機構として存在してきました。しかし近年、中国・インド・ブラジルなどの国々が、世界を動かす新たな経済主体として参入し、政治的にも大きな影響力を持ちつつあり、これによって、米・欧・日の三極体制、ひいては G8 という構造に、大きな揺らぎが生じています。世界は、新たな世界システムに向かう過渡期へと進みつつあります。

既成のシステムが機能しなくなる過渡期には、特有の様々な矛盾が出現します。実際、私たちの前には様々な難題が積み重なっています。超大国は、自ら始めた「テロとの戦い」にからめ取られつつあります。武力紛争の数自体は減っているにもかかわらず、世界の軍事費は増大し、軍事化の時代が始まりつつあります。核拡散が進行し、大国は軍縮義務を果たすどころか新たな軍拡計画を進めています。世界的な武器貿易は紛争地で無数の人々の命を奪う結果をもたらしています。「テロ対策」の名の下で、人権や民主主義を軽視する風潮が広がり、アジアの一部の国では、政治的殺人が多発するといったことまで生じています。一方で、国際社会は、スーダン・ダルフルやソマリアなどで生じている未曾有の人道危機に政治解決の道を見いだすことができていません。

世界の貧困と飢餓の問題に対する取り組みは、2000 年の国連ミレニアム総会以降進みつつあるものの、そのペースは遅く、その分解のための経済的・社会的コストは拡大していきます。世界全体で、初等教育を受けられない子どもは 7700 万人に上っています。こうした子どもたちの 3 分の 2 は女性です。教育におけるジェンダー不平等は、女性を搾取や暴力にさらしています。途上国では出産や妊娠を原因として、1 分に 1 人以上の女性の命が失われています。さらに、多くの女性や女兒、子どもが、人身売買の犠牲となっています。HIV/AIDS や結核・マラリアなどの感染症の被害は拡大し、南部アフリカの一部諸国では平均寿命が 30 歳台にまで低下し、地域全体が破局の危機にさらされています。ま

た、貧困と格差を生み出す不公平な経済・貿易政策については、是正されるどころか、近年では先進国社会をもむしばみつつあります。

気候変動の問題は、すでに環境問題としての域を超え、貧困と開発・人権と平和の問題に直結する普遍的な危機を作り出しています。人間の活動によって引き起こされた気候温暖化は、今後加速度的に進行することが予想されます。しかも、その被害を真っ先に受けるのは、気候変動の原因を作り出してきた先進国ではなく、貧しい途上国なのです。この問題への国際的な取り組みは 1990 年に開始され、気候変動枠組み条約と京都議定書を生み出しました。ところが、世界最大の温室効果ガス排出国である米国は京都議定書から離脱し、世界の温室効果ガス排出量は増加し続けています。世界の科学者は、このままでは地球上の生態系は回復不能な影響を受けると警告しています。私たちは、気候変動による災厄に脅かされつつあります。

このような状況に対して G8 は、それぞれの抱える既得権益や G8 としての利益追求が足かせとなり、国力に適った責任を果たせていません。過渡期の入り口にあたって、これからの歴史をかいま見ようとするとき、私たちはその深淵に慄然とせざるを得ません。

過渡期の深淵を乗り越え、地球とそこに生きる生命にとってよりよい世界を築いていくための鍵は、どこにあるのでしょうか。私たちは、一部の層の短期的な利益に捉われずに、地球的公共財の確保・拡大に向けて国境を越えて追求できる、市民社会の連帯にこそあると考えます。

今までのやり方が通用しないこの過渡期にあって、政治的な意思決定を独占してきた国家・政府の力は相対化されつつある一方、様々な経験と実践によって鍛えられた市民社会の、オルタナティブな政策策定能力が効果を発揮しつつあります。すでに多くの国や国際機関で、市民社会の参画が保障され、成果を挙げています。洞爺湖サミットに向けたプロセスにおいて、私たちは、国家・政府と市民社会との関係を、対等な相互批判と相互補完の関係へと発展させ、持続可能な世界をつくりだすための推進力へと変えていきたいと願っています。国家・政府、民間営利セクター、市民社会が、対等の立場から相互批判し切磋琢磨しながら、すべての人々が、戦争、貧困、気候変動や環境破壊の脅威から解放され、人権と尊厳とともに安全に生きていける平和な世界という、共通の目標に向かって協力して取り組んでいくことが必要なのです。

2008 年 G8 サミットが開催される洞爺湖。私たちは、先住民アイヌの土地・北海道でサミットが開かれる意味を問い直したいと思います。地球をむしばむ貧困、感染症、気候変動といった地球規模の問題は、先住民を暴力で支配し、収奪した強者の歴史に端を発します。2007 年 9 月、国連はこうした負の歴史を断ち切るために「先住民の権利宣言」を採択しました。洞爺湖サミットにおいて、G8 諸国もこうした歴史からの訣別を宣言すべきです。

「トーヤ」はアイヌ語で「湖岸」「岸边」を意味します。2008 年、私たちは洞爺湖サミットを、過渡期の深海を越えるための航海の拠り所となる一つの「岸边」に、すなわち、すべての人々が貧困から解放され、人権と尊厳が保障された世界、地球と生命の存続を脅かす気候変動と環境破壊から解放された持続可能な世界をつくりだすための航海の出発点にしなければなりません。準備期間は、あと一年足らず。今、私たち 2008 年 G8 サミット NGO フォーラムは、そのために、これまで以上に民主性・透明性・機能性を兼ね備えた市民社会のネットワークとして、この航海に出発します。Welcome Aboard!